

## 「新田岩松猫絵」

—新田岩松家の「猫絵」から見える幕末維新の一幕—

はじめに

「なんち、歴史の教科書では日本の近世を「江戸時代」と呼んでいる。また、それを指して、「鎖国の時代」などとも呼んでいる。

「うまでもなく、江戸時代」という呼び方は、徳川幕府の政治の中心が「江戸」に置かれていたことに由来する。

「鎖国」は、江戸時代を通じて長く続いた対外政策の一つを取り上げた名称である。それぞれの呼び方に共通するのが、その時代区分を象徴する言葉が用いられることがある。

江戸時代を指す別の呼び方の一つに、「徳川（の）時代」もある。日本の教科書などでは見かけない名称であるが、筆者はむしろ、海外などで、「こちらの名称の方がよく使われる印象を持つ。筆者自身も自らの研究について紹介する際に、日本語では「近世後期を研究している」というが、英語になると「徳川時代後期を研究している」という表現を用いる方が、「江戸時代」を使うよりも多い。

言うまでもなく、この「徳川」という時代の名は、江戸時代初代将軍である徳川家康（一五四三—一六一六）と、家康に継ぐ將軍家、後に成立する御三家（尾張、紀州、水戸）の名字に由来する。このことは、ほとんど常識というほどよく知られていると思われる。

ところが、「徳川」という名が何に由来するのか、という問い合わせられる方は、あまり多くはないのではないだろうか。

橋本 真吾

徳川家康の「徳川」とは、新田義貞（一一〇一—一二八）に連なる「新田源氏」、後の新田氏の本拠地である、上野国新田郡（現在の群馬県太田市）の「得川郷」に由来するとされている。家康は、慶長八年（一六〇三）に就任した征夷大將軍職を意識し「源氏」と改姓し、また、その源氏は「足利の源氏」ではなく、「新田源氏」であると自らを位置づけた。

元々家康は、「松平」（由来は三河国加茂郡松平郷、現在の愛知県豊田市・みよし市）を名字としていたが、どうやら、家康本人は、自らを新田源氏の血を引く者と信じていた面があったとされている。

実は、こうした家康の改姓をめぐる出来事が、近世を通して新田源氏の權威を急速に高め、そして、新田の姓をもつた一家、すなわち「新田由良家」と「新田岩松家」の運命を翻弄したのだった。

これから本稿で紹介する、藤枝市廻沢松岡神社所蔵史料における「新田徳純」を急速に高め、そして、新田の姓をもつた一家、すなわち「新田由良家」と「新田岩松家」の運命を翻弄したのだった。

「新田徳純」は、さらだ時代は飛び、一九世紀に新田岩松家一九代当主の新田徳純が描き、世に流布したものであった。筆者は、本史料を元に、動乱の幕末期における新田岩松家の運命だけではなく、この猫絵を所持していた松岡萬を取り巻く、幕臣勤皇派と呼ばれる人々の心情も垣間見えると考えている。

そこで本稿ではまず、新田岩松氏について紹介し、史料紹介と、最後は幕臣勤皇派と猫絵の関係について考察していきたい。

一、新田岩松家

本史料「新田徳純猫絵」の作者は、江戸時代「岩松」と名乗った駿様であつた。まず、新田岩松家について、そのルーツについて紹介しよう。以下、生駒哲郎氏の叙述を参考に述べていく。細かい話になるが、少々のあいだお付き合いくを願いしたい。

新田本宗家は、平安時代後期に上野新田荘（群馬県太田市周辺）の下司職と

なつたことから始まる。初代は、源義家の孫の義重とされる。義重から数えて

四代目の政義

(一一八七一一五七)は寛元二年(一一四四)、京都大番役仕

中に六波羅探題や大番役指揮者の許可なく仁和寺において出家してしまい、その名で所領を没収される。後に政義が蟄居した先が、由良郷別所(群馬県太田市別所町)であり、「新田由良家」の由来はここから来ているとされる。

新田岩松家は、義重の曾孫である義兼(一一九一?)の娘と足利義純(一一七五一一一〇)との間に生まれた時兼を祖とし、鎌倉時代から新田一族内で、独立した地位を築いてきたとされる。室町時代に新田本宗家が消滅した後も、新田岩松家は関東の鎌倉府体制に組み込まれ続けていた。同家は、文明元年(一四六九)には金山城(群馬県太田市)を拠点にしていたが、家宰の横瀬国繁が台頭し、その実権を奪われてしまう。国繁は、横瀬から由良に改姓し、新田政義を由良姓の祖とした。国繁没後の後継者の貢繁は急逝し、元和七年(一六一〇)には、跡継ぎがないとされ改易される。

新田岩松家は、当主守純(一五三一一六一六)の時代に、上野国山田郡桐生(群馬県桐生市)の龍泉庭という場所に退いていた。徳川家康が天正十八年(一五九〇)に関東征討となると守純は書を送って家康を祝い、返書をもらい、家康に拝謁することとなつた。その際、守純は家康に失言をしたとして、帰郷を命じられ、家康は守純に、上野国新田郡一の井(群馬県太田市野井町)に所在する感應寺(かんのうじ)曲輪(くるわ)二〇石を与えた。

その後、新田岩松家は世良田(太田市)に移され、寛文三年(一六六三)、秀純(義純)の時に「新田の麻流」であるとして下田島(太田市)に一〇〇石を加増された。それでも新田岩松家の知行高は、たったの合計二〇石だった。おまけに「新田源氏」の由緒によつて、岩松家は、參勤交代を強いられる「交代寄合」の身分であった。岩松家は知行高二〇石のまま、幕末をむかえる。新田岩松家には、もう一つ江戸時代を通して特別な側面があつた。それは、

岩松家の宗教活動にあつた。そのため、

岩松家の勧めは、五穀豊饒と領内の安寧の維持のために、神仏への祭祀である六波羅探題や大番役指揮者の許可なく仁和寺において出家してしまい、その名で所領を没収される。後に政義が蟄居した先が、由良郷別所(群馬県太田市別所町)であり、「新田由良家」の由来はここから来ているとされる。

また、岩松の歴代の殿様は屋敷内に諸々の神を納詣していた。屋敷内の鎮守は、元禄の頃、伊勢・八幡・稻荷の三社から成っていたが、一九世紀初め頃には、「鎮守様」「王子藤森稻荷」「鷹森稻荷」「年德神」「御靈」「八幡」「山王宮」「新田大明神」「七福神」「庖瘡神」などの神々が屋敷内に祭祀の対象になつてゐた。「新田文庫」(群馬大学附属図書館所蔵)の新田岩松氏の日記を研究した落合延孝氏は、その研究書の中で、江戸時代を通して、「呪術士」としての新田岩松家の有様を活き活きと描写している。

この宗教的・呪術的側面が、江戸時代の後期、一八世紀後半から幕末期にかけて新田岩松家を特別な存在へと導くきっかけとなつたのである。

在地の信仰習俗とつながりが強かつた岩松家は、民間信仰が隆盛する一八世纪の末にかけて、石造物などへの染筆の依頼をよく受けたと云われている。それを命じられ、家康は守純に、上野国新田郡一の井(群馬県太田市野井町)に所在する感應寺(かんのうじ)曲輪(くるわ)二〇石を与えた。

その後、新田岩松家は世良田(太田市)に移され、寛文三年(一六六三)、秀純(義純)の時に「新田の麻流」であるとして下田島(太田市)に一〇〇石を加増された。それでも新田岩松家の知行高は、たったの合計二〇石だった。おまけに「新田源氏」の由緒によつて、岩松家は、參勤交代を強いられる「交代寄合」の身分であった。岩松家は知行高二〇石のまま、幕末をむかえる。

新田岩松家には、もう一つ江戸時代を通して特別な側面があつた。それは、

墨絵の販売は、たつた二〇〇石という知行高の岩松家の貧しさを、潤わせる。

とに成功した。厳しい財政状況を工面するための打開策が、民間信仰の高まりを背景にしたものであり、本稿の主題でもある、「新田猫絵」が生まれる一つのきっかけとなつたと考えられる。

一、松岡神社史料「新田徳純猫絵」

ハハヤ、本稿が扱う史料、「猫絵（画）」を詳しくみてみよう。

【目録資料番号：38】

備考：1箱に収納。八双に「新田徳純公猫」の墨書あり。絹本墨画淡彩。  
絵裏側に題簽（メモ）あり。

新田徳純画「猫絵」

同種の猫絵所蔵（現在）：太田市立新田荘歴史資料館、群馬県立日本絹の里、The Mary Griggs Burke Collection（米国・ニューヨーク）

傍線の「題簽」については、次文を取つたので、以下に全文を載せる。

題簽次文

No. 38 松岡神社蔵（印）

新田徳純

新田氏（義定）の遠裔にして世々岩松万次郎と称し  
上野国新田郡に住し徳川氏の祖家たるを以て  
其格旗下にして而も旗下にあらず大に優遇せらる  
徳純絵画を嗜み狩野風を学びよく猫を画く或人  
それを模装して家中に掛くるに鼠皆逃遁すこれより  
世評甚だ高く新田の猫と称し画を乞ふ者内  
に壇つ

虚心筆記。

(38) 「岩松猫絵」（撮影・筆者）



【新田岩松家の殿様の歴史】

富純（寛文二（一六六一）年—寛保三（一七四三年））

幸純（宝永五（一七〇八）年—寛政一（一七九〇）年）

義寄（元文三（一七三八）年—寛政一〇（一七九八）年）

徳純（安永六（一七七七）年—文政八（一八・一五）年）

道輔（寛政九（一七九八）年—安政元（一八五四）年）

俊純（文政一二（一八二九）年—明治二七（一八九四）年）

（落合一九九六「付表」より一部抜粋）

落合氏によれば、「猫絵」の依頼が急増するのは、一七九〇年代に入つてからである。新田岩松家のお隸元である上州、信濃、武藏は養蚕が盛んな地域であり、養蚕飼育上、鼠は大敵とされた。そのような中、新田猫絵は鼠除けの効果があるものと信仰されていた。新田岩松家では、義寄（温純）、徳純、道純、俊純の四代の殿様が養蚕農民からの所望で猫絵を描いていた。

元来、猫は「經典を食べてしまう鼠を退治するために中国からもたらされた」という俗説があるように、寺院社会との縁が深いものだった。日本では、「蟲除けのための猫絵」という考え方とは、中世において、天皇の日常的な生活空間である内裏清涼殿の障子絵について語られることが多かったという。

新田岩松家の殿様が、なぜ猫絵を描いたのだろうか。実のところ、新田義貞の子義宗の守本尊<sup>守本尊</sup>の由緒を持つ埼玉県所沢市の薬王寺「鼠薬師如來縁記」に、鼠による作物荒しの被害に悩まされた武蔵国の農民たちが、その原因を新田家のみつける新田の猫絵は、養蚕地帯であった上州を中心に、鼠除けの利益があるとして、歓迎されたのだった。

「新田猫絵」は江戸にも知られており、19世紀中頃の嘉永・安政の頃に書かれた『真佐喜のかづら』の筆者青葱堂冬園は、「上野國新田郡岩松氏の絵がきたる猫の絵を張をけば鼠出ずともてはやしぬ、されど世うつりはて験も失せるにや」（『未刊隨筆百種』）と記している。それでも、猫絵は養蚕農民には「蚕の神様」として重宝がられた。ちなみに横浜開港以降、蚕種を海外に輸出する際には、鼠害を避けるために蚕種とともに猫絵もヨーロッパに輸出されている。

新田岩松家の当主であり、特に多くの猫絵を残したのが、徳純であるとされる。徳純は、文化一〇年（一八一三）の九月から一〇月までの一ヶ月間、善光寺参詣のため、信州へ旅をし、沿道の役人クラスの町人・百姓から絵を所望され、一ヶ月間に三〇七枚の画（うち猫絵九七枚）を描いているという。巻のオーフションなどで売られている猫絵の中でも、多くのものが徳純の猫絵になる。そして、ご覧の通り、松岡神社史料の猫絵の作者は、「新田岩松 源徳純画」としっかりと書かれている通り、徳純のものと見て間違いないと思われる。描かれた年代は、文化（一八〇四）から文政（一八一八）にかけてと思われる。徳純が、最も精力的に絵を描いた時期であり、評判も上がり、比較的身分の高い依頼主に向けて描いたものかと推定される。

注目してもらいたいのは、名前である。新田岩松家は、幕府に対しても岩松氏を公称としていたが、墨絵などの際には、「新田源」などと、「新田」、そして「源」の姓を名乗っている。落款には「源氏徳純」と彫られている。これは、なぜだろうか。落合氏によれば、「在郷社会の側も家名・家譜を重視する考え方から、武家の棟梁である源氏の流れを汲む新田氏の『貴種性』を求めていたのである」と述べている。依頼主が「新田」「源氏」を望んだことが、背景となる説明であるが、それも一理あるが、やはり領地収入の貧しさも、作用したのではないかと考えられる。刷收入として、猫絵を中心とした墨絵が売れれば、

財政が潤う。売れる絵にするためには、自らのアピールがインートを活かすという戦略をとったとしても、不可解ではない。<sup>15</sup>

筆者は、絵画の分析に関するでは決して明るくないが、松岡祐社史料の「岩松猫画」の特徴を次の三つで捉えている。

- ① 他の同類の絵と比べて色彩、被写体（組）など用いられているものを考慮すると、徳純にとって基準（典型）となる作品なのではないか
- ② 依頼主は身分の高い人物（幕臣）ではなかつたか
- ③ 目立つた汚れなどはなく保存状態がよいことから、表に出され崇められていたのではないか

このようにして考えたとき、次の疑問がわいてくる。それは、なぜ徳純の猫絵が松岡神社に納められていたのか。松岡萬ど、新田岩松家の猫絵の関係性は一体何で、なぜ松岡をはじめ、口幕臣はこの猫絵を（養蚕地域ではない牧之原で）崇めたのであろうか。これらの疑問は、本史料の歴史的価値を考える上で、必要な論点に違いない。

これらの論点を整理するには、まず幕末の新田岩松家の動向を、概観してお

く必要があるであろう。

三、新田官軍（勤王党）と幕臣勤皇派  
世情が乱れつづつあった幕末期、新田岩松家の当主を任せられた人物は、俊純であった。後に、明治期に爵位も得ることになる新田俊純は、現術士としての岩松家にあって安寧を祈り、多くの除け札を作り、不安定な世の中の安定に勤めたのだった。しかし、幕末という時代の運命が、またもや新田家を翻弄していくことになる。

文久三年（一八六三）一一月、武蔵国練沢郡中瀬村桃井儀八（可堂）は、攘夷計画を練っていた。内容は、交代寄合岩松演次郎俊純を盟主にして沼田城（群馬県沼田市）を襲つて攘夷の旗揚げをした後、横浜を焼き払うというものだ。元弘三年（一三三三）五月の新田義貞の鎌倉攻めを模範にし、新田の系譜をひく岩松俊純を、その盟主に押し立てようとしたものであった。「上州岩松家は新田の正統にて、昔義兵を揚侯古例」として、新田岩松家は、尊王攘夷運動のシンボルに祭り上げられた。

俊純は可堂の計画をこと聞いて、驚いた。結果的に、「盟主」となることを拒否し、計画は不発に終わった。このときに俊純は、難を逃れるために江戸へ逃避し、計画の全容を幕府に報告したとされている<sup>16</sup>。このようだ、幕末の新田岩松家は、武家の棟梁としての「新田」あるいは「源氏」というイメージからうつて変わり、新田義貞の「尊王」（あるいは「勤王」）を代表する家へと様変わりしたのだった。

幕末の最終段階になると、新田岩松家も官軍としての決起を決断する。

慶応四年（一八六八）の新田官軍は、一月二六日に「勤王誘引役」佐久間嘉計雄が、下田崎の俊純の屋敷を訪問し、官軍への協力を申し入れることから始まった。俊純は、東征大総督府に従軍建白書を提出するが、その中で新田官軍の挙兵を、次のように正当化している。

常々祖先勤王の遺志を変えず、旧封に罷り在り候一族旧臣ともを糾合仕上げ、皇家の藩屏となり下、祖先の休業を復し申したき志願にござ候千歳一時、王室中興の大機会、祖先勤王の遺志も相算き、微臣俊純多年の宿志も相立て申すべくと千歳の喜悦これに過ぎず存じたてまつり候間（中略）唯々一族旧臣を糾合仕り、皇家のため寸功相立て、先臣義貞勤王の微衷貢微仕りたき志願にござ候

祖先新田義貞の「勤王」の遺志を貫き祖先の旧業を復すためであると、俊純は述べている。その後、官軍との意思疎通で問題を生じたため、出陣許可が下るのが遅れたが、閏四月七日、新田官軍五三人は岩倉具視總督附屬を命令される。そして、同二九日に上越国境へ出陣するよう命令が下り、五月一日に江戸を出発し、四日に沼田に到着した。しかしながら、江戸における新田の家臣の悪行を理由にして、六月一口に新田官軍全員に謹慎命令が下り、大旗旗も取り上げられたとされる<sup>15</sup>。「」のように、官軍への従軍を決めたにもかかわらず、その振る舞いは必ずしも、官軍に喜ばれたものではなかつたようである。

新田官軍の主な行動をまとめる、三つあげられる。第一は、三月中旬から四月中旬にかけて上州世直し騒動を鎮圧する」と。第二は、五月から六月3日までの上越国境での警備<sup>16</sup>。第三は、八月晦日から翌明治二年一月一四日までの築地開市門の警備と木挽町一帯の市中取締りの勤務である<sup>17</sup>。「」のようにまとめた落合氏は、新田官軍を評価して次のように述べている。「新田官軍は、祖先新田義貞の『勤王』の遺志を貫いて（中略）倒幕に立ち土がつたが、結局世直し騒動を鎮圧することがその主な行動となつてしまつた。<sup>18</sup>」

された時代ではあったが、民衆のみならず、幕臣、ならびに官軍からも「勤王家」の本家本元として、崇められもし、また期待されもした。

新田岩松家は、義寄から、厳しい領地財政を打開すべく、墨絵を描き、猫絵を描き、除札<sup>19</sup>を出し、様々な事業を行つてきた。人々は、新田岩松家の宗教的・呪術的な権威と、武家の棟梁たる「新田」「源氏」のルーツを持つ「貴種性」に惹かれ、幕末期になると、宿をもたせるために岩松家の墨絵などを手に入れようとしたと言われている。

幕末期においては、特に「勤王」のルーツを持つ家柄といふことも相まって、

勤王を掲げた武士などにも、新田岩松の墨絵を持つ者が多かつたと考えるのは

想像に難くない。幕臣勤皇派の一人といわれる松岡萬も、徳純の描いた「猫絵」を所持する」とで、そうした岩松家の由緒や呪術性を身にまとい、武家として、勤王家としての自らのあるべき姿の象徴として、絵を掲げていた可能性が考えられよう。

#### おわりに

藤枝市廻沢の松岡神社に保管された史料は、調べれば調べるほど、奥が深まる、興味をそそられる。史料調査をはじめた当初を振り返ると、新田岩松「猫絵」一つで、ここまで日本史の全体を眺められるとは想像もしていなかつた。長年にわたつて史料を大切に守つてきた地域住民の方に、心から感謝を述べたい。

新田岩松家が描いた猫絵には、まだはつきりと語られていない部分もある。今回の史料のように、直接新田岩松から流通したものではないものの、人から人へ渡つた猫絵、という側面は「これからも研究領域として、関心をもたれていいところであろう。筆者自身の、今後の課題にしたい。

#### 註

<sup>1</sup> 生駒哲郎「徳川將軍家に振り回された「新田義貞の子孫」たち」『征夷大將軍研究』

<sup>2</sup> 落合延孝「猫絵の歴史・領主のフォーカロア」吉川弘文館、一九九六年、九七頁。

<sup>3</sup> 前掲。

<sup>4</sup> 詳しい依頼内容は、前掲「付表2—5」、特に「付表4」を参照してほしい。一一〇六一一一〇頁。

<sup>5</sup> 生駒前掲、一一五頁。

<sup>6</sup> 松岡家の末裔である、松岡正夫氏の筆と推定できる。

<sup>7</sup> 落合前掲、一一二頁。

<sup>8</sup> 前掲、一一二頁。

<sup>9</sup> 藤原重雄『史料としての猫絵』山川出版社、一〇一四年、三二一頁。

<sup>10</sup> 落合前掲、一一三頁。

5 前掲、一一二頁。

5 前掲、一一三一、一四頁。

5 一二〇石の殿様が、名字を自由に名乗つたという事実は、幕府權力の後退を示唆するものかどうかは、筆者は考へにくいと思つてゐる。幕末期のごく一部を除いて、新田岩松家と江戸の幕府の仲に、特段問題があつたとは考へづらい。先に言及した宗教活動についても同様だが、幕府も、ある程度新田岩松家の活動を認めていたのではないか。新田岩松家が自然に「新田」「源氏」を名乗るのは不思議な現象ではあるが、当時の史料を通してさらなる考究が期待されよう。

5 落合前掲、一七三頁。

5 前掲。

5 前掲、一七六頁。

5 落合氏は明示的に言及しないが、この時期に旧幕臣の小栗上野介（一八二一七一六八）が官軍に斬首される。一説では、新田官軍による報告で、小栗が官軍と交戦する意志のあるなしが決定された、とも言われている。新田官軍が報告を行つたとすれば、この時期になるだろうか。

5 前掲。

5 前掲、一八四頁。  
5 除れは、俊純が八人件行つたと記録され、幕末期に集中してゐる、と落合氏は指摘する。前掲、一一七頁。

7 25